

子どもの絵でこんにちは — 図画工作科における国際交流の実践的試み —

広島大学附属三原小学校 教諭 半 直 哉

(1) はじめに

“地球的市民の育成”。このことこそ、Global Partnership School Projectを貫く大きな理念である。一人でやるより協力して共同してやることははるかに学ぶことが多い。

その地球的市民のかけがえのない宝が、子どもたちである。子どもたちは、感受性が豊かであり知的好奇心が旺盛である。子どもたちは、純粋な目でものを見つめ考えていく。

そこに一枚の絵があるとしよう。しかも、違う国の子どもがかいた絵だとしたら目を輝かせて見るに違いない。「きれいな色だな。」「何をしているのかな。」など、親しみをもって楽しく鑑賞することだろう。私たちが、古典文学の登場人物の中に、現代の我々と同じ心境や気持ちに触れたとき急に嬉しくなる感覚と一緒に、違う国々の子どもたちの絵の中から、例えば、遊ぶことが好きなのだな動物が好きなのだなという思いをもつことはできるはずである。子どもたちにも絵にも国境などないのである。

私は、図画工作科の教師として、日頃、言葉も文化も姿も違う世界の子どもたちが、絵を通して語り合えたとしたらどんなに素晴らしいことだろうと考えている。

「絵は世界の共通語」という一立場から、国際交流の可能性をさぐっていきたいと考え、「子どもの絵でこんにちは— 図画工作科における国際交流の実践的試み—」というテーマを設定している。

(2) 研究の概要

① 研究の目的

日本・アメリカの両国の子どもたちに相手国の児童画の鑑賞を行い、絵画を中心とした国際交流の一方法を示す。

② 実践の概要

ア. アメリカの子どもたちにプレゼントする絵を描く取り組み

- イ. 実際にアメリカの子どもたちにその絵を見てもらう取り組み
- ウ. 継続的な作品交流に向けての交渉

③ 具体的な実践

I. [私たちがもらった(絵)の手紙(鑑賞)]の授業実践

【主な内容】

「わたしたちがもらった手紙(鑑賞)」という題材は、子どもたちが児童画をみて楽しむことを中心にした鑑賞の学習である。この学級に絵だけが入った手紙が届き、絵を描いた友だちに返事の手紙を書こうという設定を行うことで、絵の鑑賞を促そうとするものである。この題材では、アメリカの児童画(「側転」10歳・女児)を扱う。これは、「例え、話す言葉が違っても、絵を通して、相手のことが少しでも理解できるのだ。」つまり、「絵は世界の共通語」となりうるということをも21世紀に生きる子どもたちへのメッセージとしたい。国や文化が違っても、姿や形が違っても、学校生活を楽しむ子どもの姿は万国共通であろう。題材の最後には、アメリカの国の子どもたちへプレゼントをする絵「わたしたちのI love school」をかく活動へと展開していく。

【指導の目標】

- 絵をみて返事の手紙を書くという活動を通して、作者その人になりきり、絵を味わうことができる。
- アメリカの子どもたちへプレゼントする絵を楽しんでかくことができる。

【学 年】 広島大学附属三原小学校

第3学年(39名)

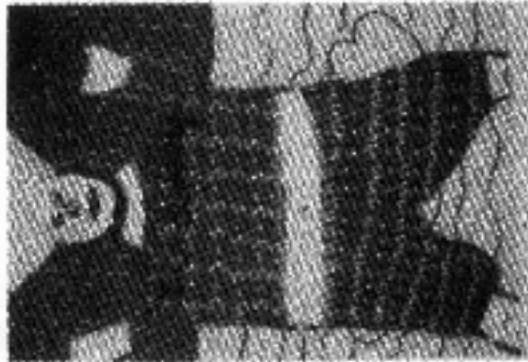
【実践年月日】 2000年2月下旬～3月上旬

【指導の実際】

子どもたちに、一通の封筒を見せ、次のように提案

する。

- この学級に手紙が来たことにしよう。
- しかし、封筒の中には、一枚の絵しか入っていないなかったことにしよう。
- 絵をかいてくれた人に、返事の手紙をかくことにしよう。さあ、チャレンジだ。



題「倒転」アメリカ 10歳・女
 (「浜田市世界子ども美術館」所蔵)

この絵はどちらから見たらいいのだろうか？

- ・髪の毛が下にたれているのでさか立ちしている絵だと思う。
- ・絵の下に名前らしきものが書いてあるから絵の向きが分かる。
- ・足のところに雲が見える。だから、さか立ちをしているんだ。

この絵をかいた人はだれだろうか？

- ・目が青いし、かみの毛が金髪だから外国の人？
- ・口べにをしているし、髪の毛が長いので女の子だ。
- ・少し太っている子だな。

「どうして体の線が赤いのだろうか？」

確かに、その絵は黒い線のふちどりの上に、赤いクレヨンでふちどりをしているのが見てとれる。学級の話し合いで、次のような結論に導かれていった。

■赤い線でふちどることで、絵の中の人物を目立たせたかったのではないか。



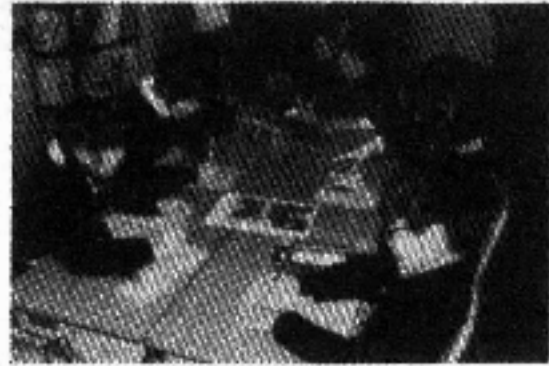
■だとすると、どうして、絵の中の人物を目立たせたかったのか。



■さか立ちをがんばっていることを絵にしたかったのではないか。

この絵は、どんなことを伝えたかったのだろうか？

- ・さか立ちができるようになってうれしかった。



- ・さか立ちが大好きなんだ。
- ・さか立ちをすることが気持ちいいんだ。

「どんな手紙を書いたのか発表してください。」

「授業中に書いた子どもの手紙例」

この絵は、さか立ちをしているように見えます。服にはあなたの名前がかいてあるのかな。さいしょこの絵を見たとき、「手が半分になってるー。」と、みんなと言っていたんだけど、きっと草の中に手がかくれているんだね。その絵を見ると、外へ出てさか立ちができる女の子……かな。目が青いということは、日本人じゃないんだね。そして、半そででいられるということは、夏なのかな。足の方に雲があるから、やっぱりさか立ちしているね。かみも下に落ちているから、やっぱりさか立ちしているんだね。



私の I love school という
 テーマで絵を描く 3年生

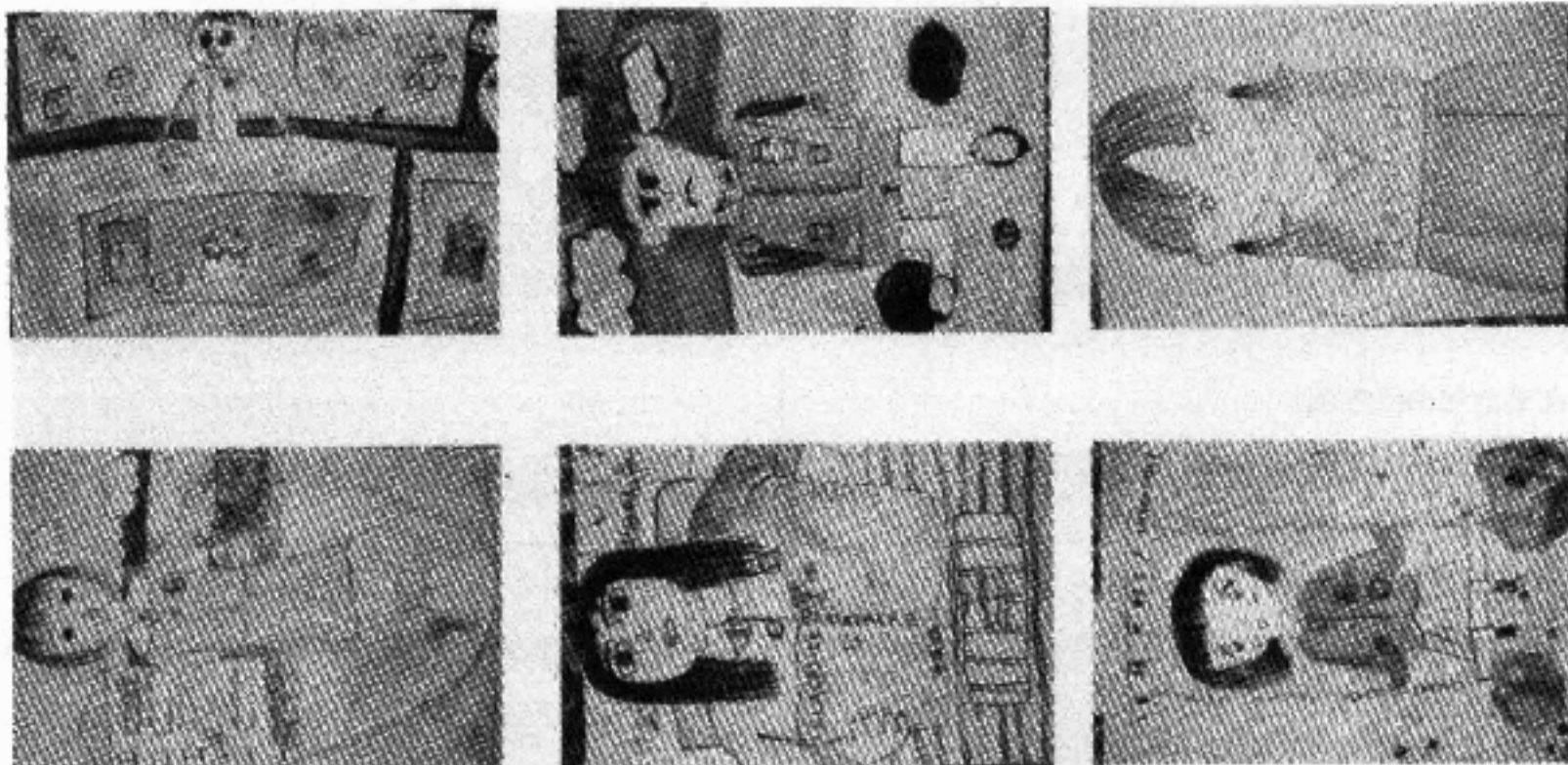
アメリカの子どもたちにプレゼントをする絵を描こう。

教師が3月の末に海外視察をするという機会をいかし、子どもたちに「絵をプレゼントしよう」ということを提案した。絵の中にある「I love school」という

文字を説明しながら、「国や姿かたちがちがっても、学校を楽しんでいるよ。生活を楽しんでいるね。わたしたちの I love school というテーマで絵をかいてみよう。」となげかけ、作品の制作にとりかかった。

次の作品が、そのときのものである。

【子どもが描いた作品例】

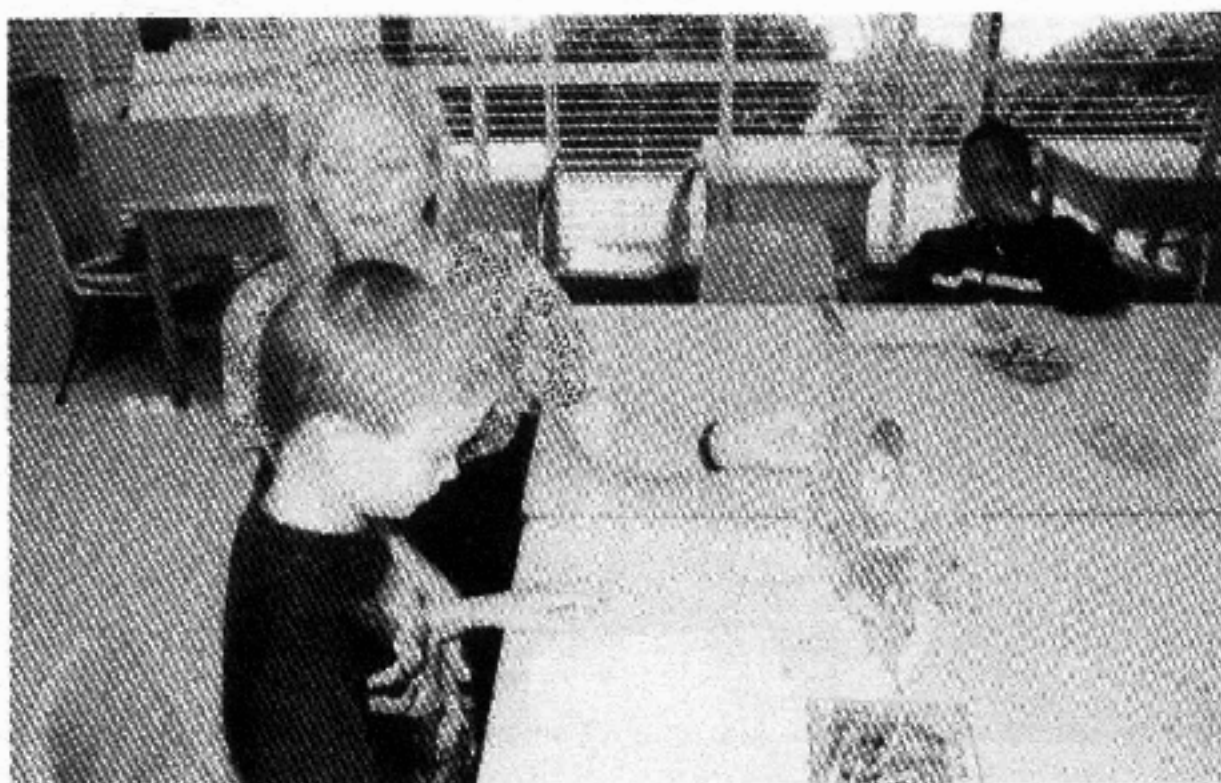


II. 子どもの絵でこんにちは

アメリカの子どもたちに描いた絵をみてもらいたい

2000年3月28日（火）～3月31日（金）（※現地時間）まで、Wahl-Coates Schoolに滞在して、学校や施設や授業などを視察した。特にそこでは、Artの授業担当者 Laveta. H. Weatherington 先生にコンタク

トを取り、日本から持ってきた「I love school」というテーマで描いた児童画を同じ年齢の子どもたちに見せたい希望を伝えた。Laveta. H. Weatherington 先生は、快く引き受けてくださり日本から持ってきた絵を描いた同年齢のG3の学級において、絵を見た感想を聞ける時間を設定してもらった機会を得ることができた。



G3の子どもたちと一緒に絵を見ているLaveta. H. Weatherington先生



日本の子どもたちに手紙を書いているG3の学級の子どもたち

【学 年】 Wahl-Coates School
G3クラス (21人)

【実践年月日】 2000年3月28日(火)～29日(水)

【指導の実際】

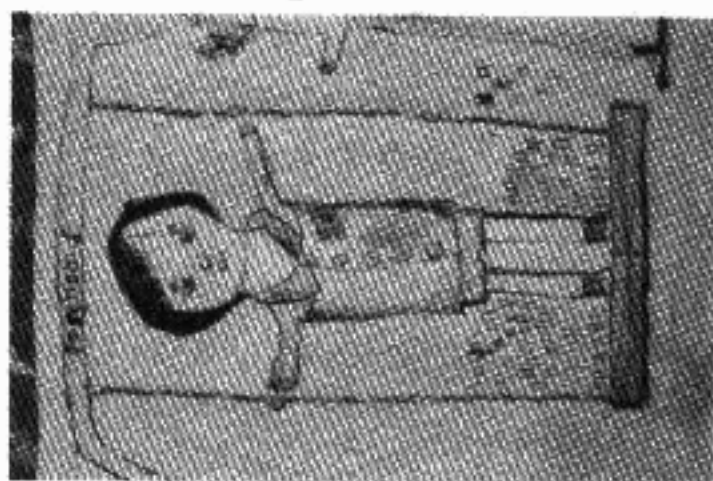
授業の最初、学級の子どもたちに紹介してもらい、

Laveta, H. Weatherington先生と一緒に、T. T. の形で授業に参加していった。

Laveta, H. Weatherington 先生の子どもたちへの投げかけにより、G3の学級の子どもたちは、感想の手紙を書く学習を行っていった。

【子どもたちの反応例】

「私の I love school」のテーマでかいた日本の子どもの絵

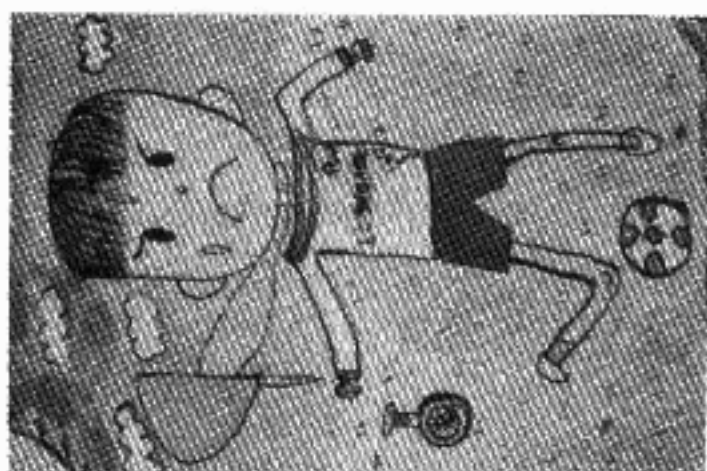


【絵の説明】

この絵は、ぼくが三年生になって、はじめて、ブランコの乗ったときの様子をかきました。あのとき思ったことは、前でサッカーをしている人がいたので、サッカーボールが当たらないか心配でした。

【絵を見たアメリカの子どもの手紙】

(略) And from your picture I can see you like to be outside on the Swing set. And I can tell by your art work you must have spent alot of time on your picture. And With all the work you have done it ternd out to bevery pretty. (略)

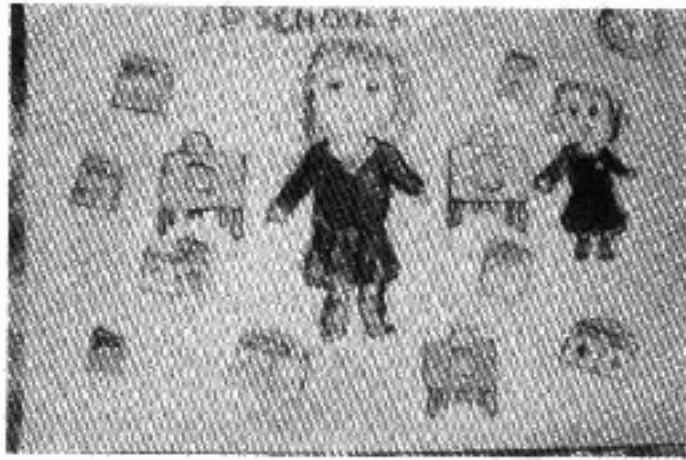


【絵の説明】

どうして、ぼくがサッカーをしているときが学校大すきかというと、学校にいるとき、サッカーをしているときが一番楽しいからです。みんなと楽しくサッカーができてとてもうれしいからです。だから、ぼくは、サッカーをしているときの絵をかきました。

【絵を見たアメリカの子どもの手紙】

(略) I am 8 years old. I play soccer, baseball, Football. I like to read. Your picture is beautiful. I can see you like soccer, unicycle. You must like sports. In your picture I want too know if it's cry or sweat. (略)



【絵の説明】

私は、スクールにある図書室の中の本を読むのが好きなので、本と私とへやの中にあるつくえやイスや時計をかきました。ほとりにいるフレンドをかいたわけは、私は、いつも私と同じように本が好きなフレンドと図書室に行くので書きました。絵にかいた場所は、図書室や教室などの室内です。

【絵を見たアメリカの子どもの手紙】

(略) I can tell you are a good student in school. You have a very nice painting. I think your favorite color is pink. I also can tell you like school very much. Do you like to listen to music? (略)

Wahl-Coates Schoolの子どもたちは、少ない時間の中で、一生懸命手紙を書いてくれた。絵についての感想を手紙に書いてくれた子ども、自分の紹介を手紙に書いてくれた子どもと様々であったが、どの手紙にも遠く離れた日本の友達への相手を思う気持ちで満ちあふれていた。特に、作品の裏にその絵を書いた子ども

の写真を貼っておいたことも、手紙を書く支援となったように感じる。日本から持っていった子どもの作品は39名分の39枚の作品であったため、Laveta. H. Weatherington先生の好意により、全員の作品に対しての手紙を書くために、二日間、2クラスに渡って貴重な時間を割いていただいた。

【現地調査の日程】

日 時	場 所	内 容	関係者・関係機関 (所属・所在者・連絡先等)
4/28 (月) 8:55	Wahl-Coates School	Artの授業(G2)を参観する。 (Laveta. H. Weatherington先生)	Wahl-Coates School 2200E. Fifth Street Greenville NC 27858 Phone 252-752-2514 : http://www.skantech.com/wahl-cpates/ Visual Arts Specialist Laveta. H. Weatherington E-mail : poweathe@eastnet.edu.ecu.edu Phone 919-752-2514
10:15		Artの授業(G4)を参観する。 (Laveta. H. Weatherington先生)	
11:00		Laveta. H. Weatherington先生との1回目の打ち合わせ(日本から持ってきた絵を子どもたちにみせてほしいことを依頼する。)	
12:55		Artの授業(G3)で、日本から持ってきた絵(小学3年生)をもとにした1回目の授業を行う。	
15:00		Laveta. H. Weatherington先生との2回目の打ち合わせ	

4/29 (火) 12:55	Wahl-Coates School	Artの授業(G3)で、日本から持ってきた絵(小学3年生)をもとにした2回目の授業を行う。	
4/30 (水)	Wahl-Coates School	本校とWahl-Coates Schoolとの継続的な児童の作品交流についてLaveta. H. Weatherington先生と話し合う。	

(3) 研究の結果と考察

「子どもの絵でこんにちは」ということで、「I love school」のテーマで描いた絵をLaveta. H. Weatherington先生の教室に持ち込んだ。絵は正直である。見る人にとって感じ方は十人十色であるが、全てが肯定的である。好意的である。

今回のGlobal Partnership School Project参加において、次のような成果と課題を述べることができる。

○ 成果

子どもの絵は、子ども達にとって「絵が上手」「絵が上手でない」という感覚は感じられない。そういった感覚は、むしろ大人の感覚である。子どもの絵は、世界の子どもたちにとってのコミュニケーションの一方策として有効である。

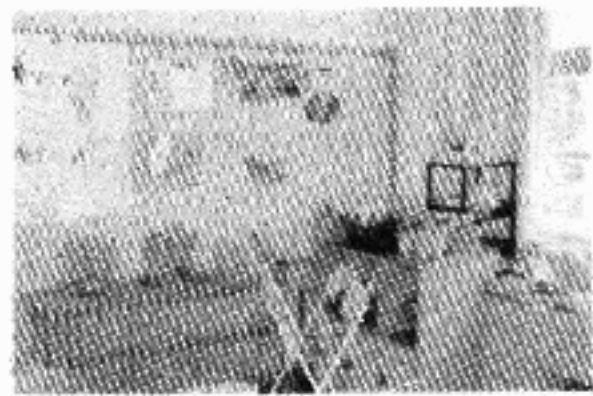
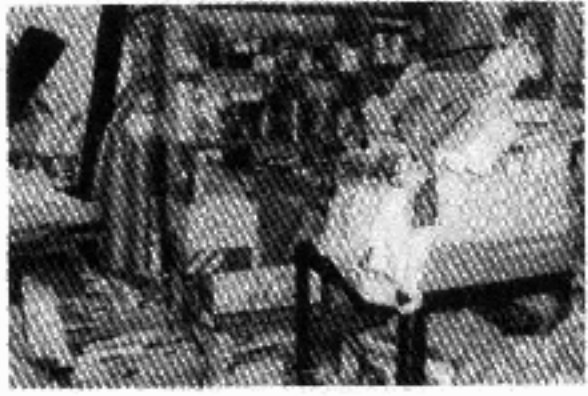
絵による交流を提案したことにより、Laveta. H. Weatherington先生との継続的な作品交流と何かかわりを作ることができた。そのことが今後の両校の交流の礎となることが期待できる。



○ 課題

今回の視察で、日本とアメリカと美術教育・或いは教育に対する根本的な違いを感じる。次の両国の図画工作科とArtとの比較表を参照すれば様々な違いを知ることができ、特に授業の時間・回数之差は歴然としている。これらのことは、どのような考え方によっているのかは、短い視察の期間では、明らかにすることはできなかった。

今後、日本とアメリカとの美術教育の考え方を明らかにしていくことが、作品交換における国際交流の大きな課題と考える。

本校の図画工作科とWahl-Coates SchoolのArt+の比較(小学校3年生とG3の場合)

本 校		Wahl-Coates School
	教室の様子	
道具などは子どもたちが自由に使えるようになっている。		活動をするための様々な道具や材料が教室いっぱい準備されている。
1クラス40人を基本とする。	1クラスの人数	1クラス20~27人クラスの少人数
週2時間	週の時間数	Centers (Wednesday, Thursday) と呼び、reading→art→writing と曜日ごとにローテをくんで行っている。

		Special classes に出る子どもたちは、さらに、週1回Artの時間がある。(40分)
45分×2	1回あたり時間	30分
 <p>児童机を使う。あるいは、作業用机を使う。 必要に応じて、グループで活動を行う。</p>	授業の様子	 <p>1テーブルに4～7人の人数に分かれて活動を行う。</p>

(3) 今後の展望

子どもの絵を通して、本校とWahl-Coates Schoolの子どもたちとの交流の基礎づくりができたと言える。Wahl-Coates Schoolの子どもたちやLaveta. H. Weatherington先生との交流をこれからも続けていきたいと考えている。

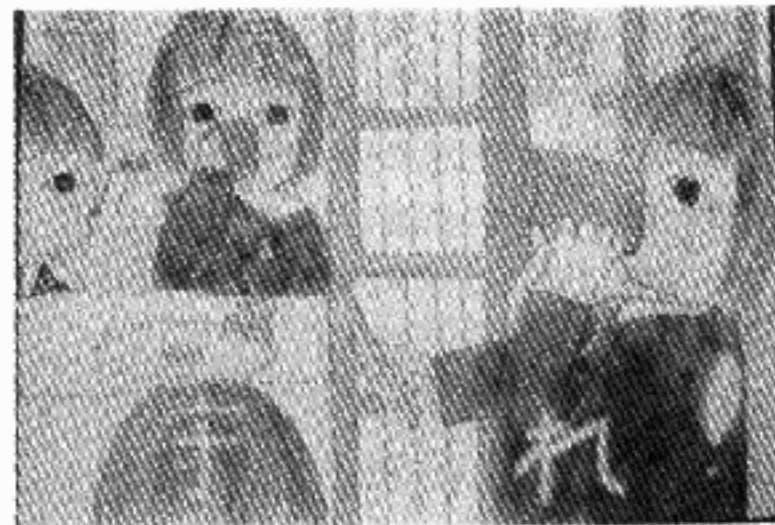
くしくも、Laveta. H. Weatherington先生とは、これからの作品交流を継続していくことを約束することができた。私にとっても子どもたちにとっても、幸運なことである。

今後、作品交流を通しながら、国際交流の形を模索していきたいと考えている。

(4) おわりに

短い期間であったが、Wahl-Coates Schoolでの視察や先生方・子どもたちと交流をもつことができ、大変有意義な研修となった。特に、現地の先生方には、言葉や習慣が違う私に対して、とても親切にしてくださり感謝の念に絶えない。

国際交流の基本は、やはり、心と心との交流が一番大切である。しばらくすると、第二回米国教員受け入れがあるが、できるだけのことを行いながら、両国の交流を図っていきたいと考える。



次回、Wahl-Coates SchoolのLaveta. H. Weatherington先生に送る作品例

話し言葉教育におけるコミュニケーション能力育成の日米比較研究

—対立する意見をいかに解決するか、日米の教室文化の違い—

広島大学附属三原中学校 教諭 木本一成

1. はじめに

国語教育の中で、「話す・聞く」という話し言葉教育(コミュニケーション)の領域は、その重要性がいつも指摘されてはいるが、実際には熱心に取り組まれているとは言いがたい。各種の研究レポートや研究授業を見ても、「読む」「書く」の領域が圧倒的に多い。確かに、一部にはディベートなどの実践が試みられている。しかし、その多くは、形式論理を中心とした技能を身につけることに終始しており、生きて働くような力にはなっていないようである。その結果、学級会などの「実の場」において、議題について立場や根拠を明確にして議論するという事は、あまり見られない。

これに対して、アメリカでは、「スピーチ」などの話し言葉の領域が、国語科から独立して設けられており、議論などの話し合いの授業が積極的に行われているという。また、授業では多くの生徒が積極的に発言し、議論が活発に行われていると聞く。

日本の国語教育界が不得手としている領域を、どんな方法で実践しているのか。アメリカの子どもたちのコミュニケーション能力は、どのように育てられているのか。人間関係の中の感情的な問題は、どのように

扱われているのか。そもそも議論を育む教室は、どのような文化や雰囲気をもった環境なのか。このようなことを、このプロジェクトの中で明らかにしていきたい。

2. 研究の概要

(1) 授業の中で、生徒や教師は、対立する意見をどのように解決しようとしているかを観察する。

観察の視点は、次のとおりである。

- ① 教室の雰囲気
- ② 話題についての認識
- ③ 話し合いの文脈についての認識
- ④ 人間関係についての認識
- ⑤ 問題解決法についての認識

(2) 授業の中で、生徒や教師は、対立する意見をどのように解決しようとしているかを、授業後に教師に質問し、聞き取る。

(3) 生徒に、日本の話し合いの様子をVTRで視聴させ、それについての感想・意見を述べてもらう。

実際に用いたVTRの内容は、次のようなものである。

「席替え」の話し合い

授業者 木本一成

1. 学 年 中学2年 (41名)
2. 議 題 席替えをするか否か
3. 日 時 2000年2月上旬
4. 備 考 話し合いは、全部で35分を要した。このVTRには、その一部を抜き出し、12分に編集している。
5. 主な発言者
司会者① (永井くん)
司会者② (炭本くん)
北村くん …… 席替えを主張
烏田くん …… 席替えに反対
岡本くん
高橋くん

6. 話し合いの記録 (発言の概略)

司会 ①：席替えをしたい人は、その理由を教えてください。

北村くん：そろそろ席替えをする時期だと思います。それに、気分転換になります。

島田くん：したくありません。この席はスチームの近くで温かいし、また、グループの人とも仲良くやっているからです。

司会 ②：どっちでもいいと言う人はいませんか。

司会 ①：席替えをしたい人は手を挙げてください。

席替えをしたくない人は手を挙げてください。

島田くん：ちょっと質問だけど、席替えというのは、グループの位置を変えるのですか、それとも、みんな席の位置がバラバラにするということですか。

司会 ②：グループの位置だけ変えるのがいい人は手を挙げてください。

司会 ①：変わりたい人だけ変わる、というのはどうですか。他の人はそのままです。

岡本くん：それでは、男子と女子の人数が合わなくなることもあるので、そういう時は、男子が女装するんですか。

司会 ①：多数決をとります。席替えをしたい人は手を挙げてください。

司会 ②：多いので、席替えをすることにしてもいいですか。

島田くん：お願いなんだけど、自分たちのグループだけは席替えをしないと言うわけにはいきませんか。
(「わがままだ」という声あり。)

北村くん：それは、自己中心的な意見です。「温かいから」「同じグループの人が好きだから」という以外の、もっと積極的な理由はないんですか。

高橋くん：(北村くんを指さして) お前は、なんで席替えしたいん?

北村くん：気分転換だよ。

高橋くん：席替えをしたくない。ここの席は気に入っているから。……今日は欠席の人もいるから、もう話し合いは終わろう。

北村くん：目が悪くて黒板の文字が見えにくいとか、という理由はないのか。

島田くん：ここのグループの人は、全員変わりたくないと言っているから。

北村くん：そうしたいのならば、席替えをして、もう一度、今と同じメンバーで同じグループを作ればいいんじゃないか。

島田くん：わかりました。

(4) 現地調査の日程

Martin Middle School 400 E. Johnston St. Tarboro, North Carolina

日にち	内容	関係者
3/27 (月)	10:30~11:40 Martin Middle School訪問	
3/28 (火)	9:00~10:00 Japanese classの授業 10:00~11:30 6th grade teachers meeting (学年会)の参観。 11:30~12:30 文学(6th)の授業参観 13:00~13:30 文学(6th)の授業参観・第2部 13:30~14:38 English class(7th)の授業参観 14:38~15:00 明日の打ち合わせ	キョヅカ先生 Amy Marshall-Brawn Barbara Dewey Marshall Matson Marshall Matson Scotto Tiernan Ms. Andrews

3/29 (水)	8:35~9:15 Japanese classの授業 9:15~9:45 meeting (Tiernan) 9:45~10:35 Language Arts (Tiernan) Video Lesson “日本の教室の話し合いを見て” 10:30~11:30 スペイン語 (Sugg) 11:30~12:25 Keyboard (Ms. Pchellca) 12:25~14:00 mathematics class (Ms. Andrews) Video Lesson 近藤 “日本の子どもたち” 14:00~14:45 インタビュー “カウンセラー” 15:00~16:00 Meeting (職員会議&歓迎会)	キョヅカ先生 Scotto Tiernan Scotto Tiernan Sugg Ms. Pchellca Ms. Andrews Ms. Moore Ms. Moyer
3/30 (木)	8:40~9:10 散歩&インタビュー 9:10~9:30 7th grade meeting 新年度のカリキュラムほか 9:40~11:30 総合学習の発表会 3クラス合同で実施 Power Pointによるプレゼンテーション 11:30~12:30 インタビュー「新しい試み」 12:30~14:40 Science 7th 補習クラス (Tiernan) 昼食で一時中断 日本語・日本文化の紹介 Video Lesson 近藤 “日本の子どもたち” 15:10~16:10 インタビュー「新しい試み」	Marshall Matson 校長、教委ほか Marshall Matson Scotto Tiernan Ms. Andrews Scotto Tiernan Marshall Matson Scotto Tiernan Ms. Andrews
3/31 (金)	8:40~9:45 Sosial Study (Girvan) 6th 3クラス合同で授業 途中で避難訓練が2度ある VTR「大阪・上之島中学校」 日本についてのアンケートをカードに書かせる	

3. 観察の結果と考察

《個人的な研究課題についての考察》

(1) 学校・学級を観察して

① 教室の雰囲気

- ・規律があり、非常に静かである。授業中に私語はほとんどない。また、あったとしても非常に小さな声で短くささやくように話す程度である。
- ・全体的に、熱心に学習に取り組んでいる。

② 話題についての認識

- ・話題そのものがきわめて単純化されていることもあるが、多くの生徒が正しく認識しているようである。

- ・話題そのものが、次から次と目まぐるしく変わっていくような展開をとらないようだ。

③ 話し合いの文脈についての認識

- ・授業では、常に教師が話し合いを管理し、コントロールしている。話がそれ始めると(文脈を逸脱しそうになると)、すぐ教師が修正する。その際、「いま何のことを話題にしているか」を常に意識させようとしている。

④ 人間関係についての認識

- ・授業中はほとんど私語がない。また、発言する際も、自分の考えを教師に伝えるというスタイルである。したがって、日本のように、「意見は

違うけど、あの人とは友だちだから、賛成にしておこう。」という様子は、見られなかった。日常的な生徒相互の人間関係がよく分からないので、はっきりとは言えないが、他の生徒のことを気にしながら意見を言うことはないようである。

⑤ 問題解決法についての認識 など

・授業の中では、そのような場面を観察する機会がなかった。

《一般的な気づき》

① 授業の進め方

・授業に、「展開」という発想が見られない。1時間の授業が、日本のように、「導入→展開→終結」という形で行うようにつくられていない。
・学習課題は、到達目標が明確でしかも、簡潔な形で示されている。授業は始まると、すぐその課題を淡々と追究するという感じである。
・ワークシートを使う授業が多い。

② 校長・教頭

・管理職のリーダーシップが強い。職員会議では、校長が一方的に命令を下す、という性格が強く現れていた。
・しばしば、構内を巡回したり、授業をしているクラスを覗いては、「騒いでいる生徒はいないか」「遅れてきた生徒はいないか」「服装の乱れた生徒はいないか」と問いかけていた。

③ 学校の雰囲気・規則

・秩序の維持に、多くの努力が払われている。教室移動の際の整列、授業中の私語、厳しい罰則規定、などに見られる。

④ 新しい授業の試み

・Marshall Matson たちのクラスでは、3クラス合同で、テーマ学習をしていた。社会科、数学科、国語科の合科で、グループごとにテーマを決め、外国にアンケートを依頼し、その結果をパワーポイントで表現してプレゼンテーションする、という授業が行われていた。
・Sugg 先生のスペイン語でも、家の間取りや構造などの教材を使って、国語と家庭科の合科的な授業が行われていた。

(2) 教師へのインタビュー

次のような反応が見られた。

① Marshall Matson / Scotto Tiernan / Ms. Andrews

(※ Leadership Academy of Martin Middle School の中心的な教師)

ア. 「日本の教室は、いま秩序が乏しく騒々しいことが問題になっている。アメリカの教室は静かだ。」という、「聞いているのと違う。意外な感じがする。」という答えが返ってきた。

イ. 多くの教師が参観する、「授業研究」のようなものはない。それぞれが自分のスタイルで授業をしている。

ウ. 教師の部屋は与えられるが、そこで使う教材については、紙代を除いて、すべて教師の負担になる。(教材費不足に悩んでいる。)

エ. 毎年同じ学年を受け持ち、毎年同じ事を教える、といういまのスタイルに不満を持っている。彼らは、日本の「学級担任制」に強い関心を持っており、自分たちの学校で特別なプロジェクトを組んで実行しようとしている。

オ. 教科の教師が、カウンセラーが受け持っている仕事の一部を受け持つべきだと考えている。

② Ms. Moore / Ms. Moyer

(※ Martin Middle School のスクールカウンセラー)

ア. この中学校には、カウンセラーが2名いる。

イ. 指導する生徒は、平均1日5名くらい。

ウ. 生徒指導・進路指導が主な仕事内容である。

養護教諭がいないので、その仕事も請け負っている。

エ. 教科の教師とは、「記録用紙」「メールボックス」を使って連携している。

オ. 現在は、生徒指導などのための家庭訪問は行っていない。そのような事態が生じれば、Social Worker が担当することになる。

カ. 「教科の教師」とカウンセラーは、仕事をはっきり分けていると言うが、観察してみると、いろいろな場面で、「教科の教師」による生徒指導のようなものが行われていた。

(3) VTRを見ての感想 (生徒)

次のような反応が見られた。

ア. 騒々しい。やかましい。

イ. にぎやかで楽しそうだ。

- ウ. みんな同じ服 (制服) を着ている。
- エ. 人数が多い (41名)。
- オ. 自分の考えるところをしっかりと主張しているようだ。
- カ. 先生は、教室のどこにいるのか。(生徒だけで話し合いを進めている?)

4. 今後の展望

(1) 教師レベルでの交流

Martin Middle SchoolのMarshall Matsonは、学校改革のプロジェクト“Leadership Academy”を作成し、2000年の9月からスタートしようとしている。

彼がモデルにしたのは、日本の学校の「学級担任制」「学年持ち上がり」などである。

なお、このプロジェクトは、学校規模のものではなく、Marshall Matson、Scotto Tiernan、Ms. Andrewsの3人を中心に計画されたものである。Scotto Tiernan、Ms. Andrewsの2人は、この6月に来日し、本校に視

察に来ることになっている。

彼らが、日本の教育システムを学ぼうとしているように、我々もアメリカの教育システムに学んだり、教育実践の交流をすることが有益であると考える。

(2) 生徒レベルでの交流

Martin Middle Schoolから依頼されたアンケート調査を、本校の3年生に行った。

生徒には、英文を読み、英文で答えるように指導した。「なぜ、ガムやアイスクリームの香りのことを質問するのか」「親の職業は『会社員』って答えじゃいけないんだったら、何て答えればいいのか」。辞書を引く苦労はあったが、アメリカ文化を体験している喜びを感じているようだった。その中で、次のような発言があった。「僕たちも、同じようなアンケートを作って、アメリカに送って返事をもらいたいね。」というものだ。

生徒は、アメリカの中学校との交流に興味を持っているようだ。